

コロナ禍と 「障がい者と教会」

2020 年度

日本基督教団中部教区

「障がい者と教会」委員会

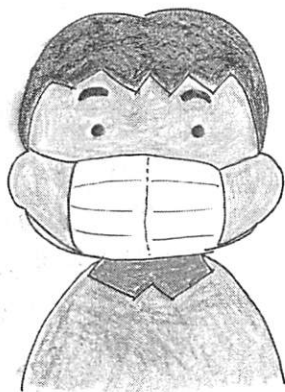
【はじめに】

本書作成の趣旨

委員長 柳本秀良（岡崎教会）

中部教区「障がい者と教会」委員会は、教区の常設委員会として、障がい者に対する教会のハード面、ソフト面でのハードルを低くすることと、障がいを持つ人が教会の構成メンバーとして信仰生活を送るための課題は何かを考えてきました。そして、課題を共有し担っていくために、毎年教区全体を対象とした「交流集会」と、各地区のご協力による「地区集会」を行ってきました。しかし、2020年3月頃から始まった新型コロナウイルス感染拡大のために、教区の各部・各委員会と同様に、集会等が開けなくなりました。当初、委員会はなんとか集会を開こうとしましたが、密を避けて集会を開くことは困難だと判断し、2020年度の活動をどうするか模索しました。

この新型コロナウイルスの感染拡大により、様々な障がいを持つ人たちは、今まで以上に生きづらさを抱えています。そこで、コロナ禍の今だからこそ、障がいを持つ人たちがどのような生きづらさを抱えているのかを、実際に声を聞いたり、その状況を書き留めていくことが大切だと考えました。そこでこの冊子を発行することにしました。「障がい者と教会」委員会各委員からの原稿と、愛実の会から戸田真二さんに、またご自分自身が聞こえづらさを持ち、コロナ禍での厳しさを実体験されている江連紀子さんに、原稿をお寄せいただきました。感謝します。



2020年春の国の緊急事態宣言により、一旦はおさまりつつあるかと思われた新型コロナウイルスは、2021年1月その感染の拡大状況と医療機関のひっ迫が顕著となり、再び国の緊急事態宣言が出されました。ワクチンの開発などの希望も見えてきましたが、障がいを持つ人たちの「生きづらさ」はまだまだ続いています。各教会・伝道所のみなさんが、この冊子をお読みくださり、どのような取り組みができるかを考えていただければ幸いです。

【視覚障がい者からの声】

コロナ禍の視覚障がい者と教会

委員 田中文宏（名古屋桜山教会）

はじめに

2020年1月に中国の武漢で確認された新型コロナウイルスの感染症は急速に世界中に拡大し、今なお終息の見通しが立っていません。コロナ禍によって社会は厳しい試練に直面し、経済はひっ迫しています。特に、医療や福祉に従事している人たちは、日々苦闘を余儀なくされています。教会においても、同様です。国の緊急事態宣言が出された期間、主日の礼拝を守ることもさへ難しかった教会も少なくありませんでした。しかし、このような試練の中で、教会はお互いに知恵を持ち寄って礼拝を守り、主の業に仕えてきたのではないのでしょうか。一例として、多くの教会がオンラインによる礼拝を開始し、ITの機器を利用して教会と信徒を結びつけるようになりました。ズームを使った会議は教会でも市民権を得るようになってきました。視覚障がい者の中にも、音声パソコンや視覚障がい者対応のスマホを活用して、礼拝や教会の活動に参加する方も増えています。主イエスは、「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。」（ヨハネ15:5）と言われました。教会は主イエスの体であり、私たちは障がいの有無に関わらず教会のかけがえのないメンバーです。コロナ禍の中で様々な制約を強いられていますが、主イエスにしっかりとつながっていきたくと願います。

今、問われていること

このたびの新型コロナウイルスの感染症は、障がいの有無に関わらずすべての人にとって避けて通ることのできない問題です。しかし、感染状況の分析を進めていく中で明らかになってきたことの一つは、社会的に弱い立場に置かれている人たちがより厳しい現実と直面していることです。経済的に貧しい人たち、高齢者や施設に入居している人たち、心や体に弱さを抱えている人たち、外国人労働者の人たちにとって、新型コロナウイルスに感染することは生活や生命に関わる危機をもたらしているのではないのでしょうか。これは感染の拡大によって、これまでは潜在的であった問題がより顕在化してきたことを意味しています。つまり、日常の中で隠されていた問題が、

コロナ禍によって可視化されるようになったのです。実は、このような指摘は震災などの災害においても、しばしば指摘されてきました。今回のコロナ禍によって、社会の様々な仕組みだけでなく、人と人の関係も改めて問われているのではないのでしょうか。これは社会生活だけでなく、教会生活にもあてはまります。このような視点に立って、視覚障がい者と教会の問題を考えてみたいと思います。

視覚障がい者と教会

視覚障がいは、しばしば情報障がいと移動障がいと言われます。私たちは、外部からの情報の80%を視覚を通して得ると言われます。視覚障がいは、見えない、見えにくいために得られない情報を、耳を通して、手で触れることを通して、時には嗅覚や味覚を通して得ようとするのです。視覚障がいは声で相手を認識します。親しい人であれば声を聞くと誰かがわかりますが、知らない人だとまず名のついでにいただく必要があります。ところが、感染防止のために声を出さないように求められています。視覚障がい者が礼拝に出席した場合、誰も声をかけてくれなかったり、たとえ隣に座っていても声をかけてくれないと、無人島に一人であるような気持ちになります。また、感染防止のためにマスクを着用し、私語を慎むように声高に言われると、特に耳の遠い高齢の視覚障がい者にとっては孤立感を深めることになります。さらに、視覚障がい者のいる教会では点字の週報、聖書、讃美歌などを整えています。会堂の座席に所狭しと分厚い聖書や讃美歌などを積み上げている場合もあるようです。ご存じのように点字は手で触れて読むものです。視覚障がい者にとって、点字に限らず、座席の位置の確認や、会堂内の移動の時には椅子、ドア、手すりなど、手で触れて確認します。ところが、感染防止のために手指の消毒だけでなく、いろいろな物に触れないようにと暗黙のうちに求められているのではないのでしょうか。視覚障がい者にとって、やっと出席できた礼拝です。できれば親しい信仰の仲間と手に手を取って挨拶をしたり、お話をしようとしても、三密を防止するコロナ禍の下では到底許されない状況と言えます。聖餐についても、パンや盃をどのように取るかについて、見えないことが対応をより困難にしているのではないかと思います。

今回の新型コロナウイルスの感染症が社会的に大きな問題となり始めた頃、視覚障がい者の中でガイドヘルパーを利用する人たちから助けを求める叫びが上がりました。近年、日常生活の中で、買い物、通院、旅行など、多くの視覚障がい者がガイドヘルパーを利用するようになりました。実は、教会の礼拝や集会の送り迎えにガイドヘルパーを利用している人も少なくあり

ません。これは家族の介助の負担を軽減するだけでなく、視覚障がい者の生活の質の向上をはかる福祉制度であり、障がい者に対する合理的配慮と言えます。ところが、手引きをすることは濃厚接触にあたるとして、感染を恐れる事業所がヘルパーの派遣に難色を示すようになったのです。通院に難儀をしたり、買い物を一緒に楽しめなくなったと不満を漏らす方もいました。外国から入ってきたソーシャルディスタンスという言葉が、社会の中で我が物顔に闊歩して、見えない人たちはソーシャルディスタンスをとれないと思われ、家の中に閉じ込められるようになったのではないのでしょうか。ある視覚障がい者の落語家は、新聞紙を丸めて一方の端を自分が握り、もう一方の端を手引きの人に引っ張ってもらっている動画をネットにアップして、視覚障がい者の窮状を訴えていました。しかし、多くの視覚障がい者はステイホームに従い、できるだけ外出を避け、ガイドヘルパーの支援も利用しなかったのではないかと推察されます。また公共交通機関を利用して礼拝や集会に出席することを控えている教会もあります。ある視覚障がい者の集会では、手引きの代わりに車による送迎が行なわれました。視覚障がい者の教会生活にとって、ソーシャルディスタンスの問題は大きな障壁になっていますが、手指の消毒やマスクなど、感染防止に留意をすれば、ひじや肩に触れて手引きをすることを可とするガイドラインを出している団体もあります。さらに名古屋の視覚障がい者の関係団体の方は、今回のコロナ禍の中でガイドヘルパーの利用が非常に少なくなり、ヘルパーの方たちも収入が減少して困っていたと教えてくれました。障がい者の問題は、特別な問題ではなくて、社会にも、教会にも大きな影響を与えていることを問われた次第です。

おわりに

コロナ禍の中における視覚障がい者と教会の問題を考える時、まず当事者である視覚障がい者の気持ちや意見を聞くことが大切です。見える人にとって善意の配慮が、かえって見えない人の気持ちにそわないことや、やれば出来ることもその機会を奪ってしまうことになるからです。当事者と牧師、教会が知恵を出し合い、祈りつつ、ひとつひとつのバリアを解決することが求められています。試行錯誤もあろうかと思いますが、そのような取り組みの一つひとつが教会の仕組みや人間関係をより豊かにしていくことを期待しています。そこにコロナ禍を転じて祝福に変えてくださる神の導きがあると信じています。

【聴覚障がい者からの声】

コロナ禍の「新しい生活様式」と変化

江連紀子（豊田教会）

聞こえにくい人の聞こえ方は、高い音は聞こえるが低い音は聞こえにくい人。その逆の人。人の声の周波だけが聞こえない人。聞こえなくなった時期の問題など多種多様であり、コミュニケーション方法も多様です。コミュニケーション手段には、手話、要約筆記、筆談、文字（パソコンなどによる音声認識）、補聴器、人工内耳、口話などがあります。聞こえない・聞こえにくい人（以下、聞こえない人）の共通点が1つあります。それは口を読む、表情を読むことです。

聞こえない人は、毎年春の花粉症、インフルエンザ流行の時期になるとコミュニケーションに苦勞します。職場や店ではマスク装着の人が増えるからです。マスク越しの音声は聞こえる人でも聞き取りにくいことがあると聞きます。聞こえない人は口の動きが見えないために、話しかけられていることに気づきにくく、口が読めないために、何を話されているのか聞き取れないことがあります。また表情が読めないため、その人の感情が読み取れない弊害もあります。これまでは「聞こえませんが、口を読むのでマスクを外していただけますか」とお願いをしてきました。また、マスクを着けていない人を探して、その人に話しかけたり、レジを選んだりします。しかし、今は新型コロナウイルス感染予防のために、常にマスクを装着しなければならず、マスクを外してもらうことは難しくなりました。

新型コロナウイルスによる「新しい生活様式」には、生活面や情報取得、コミュニケーションにおいて多くの困難を感じています。人との接触を避け互いに距離を置いたり、常にマスクを着け、ビニールシート越しのやりとりなど、感染予防のための行動規範が、聞こえない人にとっては会話や暮らしの新しい壁となりました。

超高齢化社会の今、教会にも聞こえにくくなった方が何人かおられると聞きます。豊田教会では、以前から①補聴システムの使用（聞こえにくい人の耳にヘッドフォンで直接音声が届き、雑音に左右されることなくクリアに聞こえる）、②説教原稿の配付、③牧師はソーシャルディスタンスを守りつつ、

説教時のみマスクをはずすという工夫をしています。聞こえない人を置き去りにしない、人にやさしい教会のために、2つの提言をいたします。

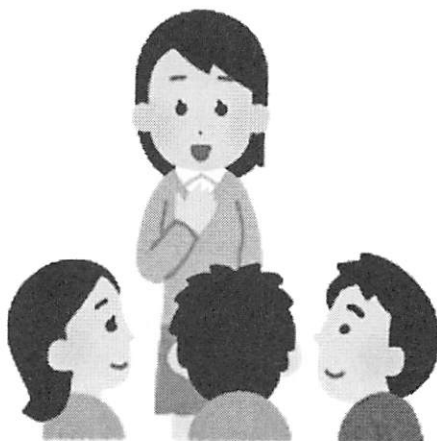
1. 文字があれば、みんなと一緒に礼拝に参加できます。

説教の原稿を用意してください。最近、音声自動で文字化してくれる音声認識アプリも増えてきています。音声認識アプリを使えば、聞こえない人も祈りや説教、報告の内容をリアルタイムで知ることができます。ぜひこういった機能も活用してみてください。

2. 声も筆談も、大きめにはっきりと。

聞こえにくい人の聞こえ方は様々です。マスクをつけるとくぐもった声になりがちですが、高齢者の方には、大きな声ではっきりと話せば伝わることも多いです。音量だけでなく、発音と滑舌にも気をつけていただけると、より良いです。また、聞こえない人は、筆談の方が会話しやすいこともあります。ソーシャルディスタンスをはかりながら、距離があっても見やすいよう、大きな文字で書いてください。

マスクをしても、目と目を合わせた挨拶は安心します。また笑顔は顔の筋肉が動くので伝わります。目と目を合わせてお互いに主の平安とあいさつをしましょう。



【精神的な弱さを持つ人たちの状況】

コロナ禍が精神的な弱さを持つ人たちにおよぼす影響

委員 森松民子（赤池教会）

もともと精神的な弱さを持っている人が、新型コロナウイルス感染の拡大、防止策のなかで、厳しい状況に追い込まれています。

<うつ傾向のある女性>

Aさんは、子どものころから鬱傾向がありました。そして結婚し、自分の心のバランスを取りながら三人の子どもを育ててきました。これまで毎日、小学生、中学生の子どもたちを学校に送り出し、就職したばかりの子どもを、ホッとしつつ心配しつつ、通勤を見守っていました。ところが新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、小、中学校は休校になり、就職したばかりの息子は自宅待機、夫も在宅勤務になりました。Aさんは昼間、今まで家族を送り出してから、自分の時間を持ち、子育て、家事、夫との関係のバランスをとってきました。ところが子どもたちや夫が一日中在宅するようになり、家事が増え、これまで以上に子どもたち、夫との生活に気を使うようになりました。今まで気にしていなかった、家族の行動が気になる様になり、「よくわからないけれどもイライラしてしまうようになった」と言います。「どうしても、子どもや夫のすることが気に障り、怒鳴ってしまう」と言うのです。そこでクリニックに通院し、カウンセリングを受けながら、穏やかな気分を取り戻すように心がけています。しかし気分の波はなかなかおさまりません。人との関係の中で疲れてしまうので、少ない時間でも、リラックスできるように、家族の協力を得て、自分の時間を持つようにしています。

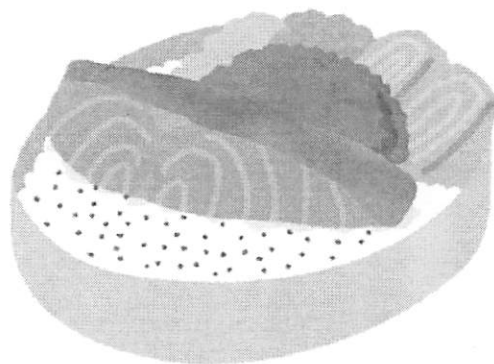
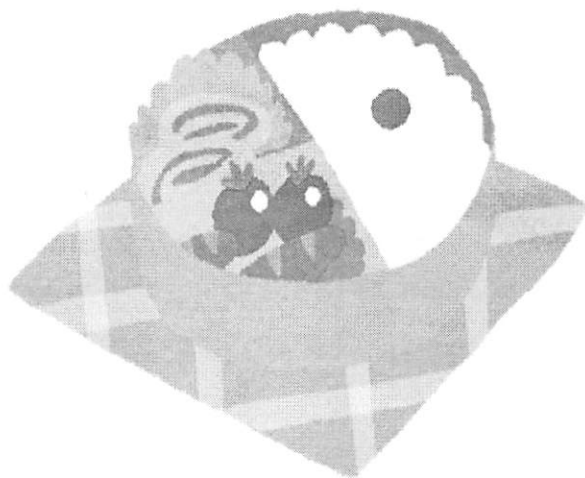
<拒食症の経過のある女性>

Bさんは子どもの時、食べては吐く行為を繰り返し、拒食症と診断されていました。しかし、年齢を重ねるごとに治まっていき、結婚し、夫、中学生、大学生の子どもと生活してきました。朝、家族の食事をつくり、中学生の子どもにお弁当をつくり持たせて送り出す、という生活がBさんの生活リズムとなっていました。ところが中学校が休校になり、大学生は自宅でリモート配信の授業を受け、夫も在宅勤務となりました。常に家族が家にいる生活となり、時間に追われることがなく、中学生の子どものお弁当もつくらなくてよくなりました。

確かに朝の忙しさに緊張し、家族を送り出すと疲れを感じていましたが、決まった時間に起きて朝食とお弁当をつくって送り出す、という生活リズムが崩れ、それと一緒にBさんの心のバランスも崩れてしまい、食べられなくなり、痩せていきました。そんなとき中学生の子どもがBさんに、「おかあさん、学校に行くときのように、家にいてもお弁当をつくってよ。お弁当が嬉しい」と言いました。

それから、毎朝、家族への朝食と、家にいる中学生のためにお弁当をつくるようになりました。Bさんは「子どもが喜んでお弁当を食べてくれるのが嬉しい。お弁当をつくるのが、生きがいだったのだとわかった」と言っていました。Bさんは、少しずつ食欲も出てきて食べられるようになり、心と身体のバランスも取り戻してきています。

新型コロナウイルス感染防止を心がけるなかで、一人一人が生き生きと生活し、リラックスするための方法を、ご一緒に探っていけたらと思います。



【施設の子どもたち・知的障がい者施設の人たちの状況】

コロナ禍での子どもたち、障がいを持つ人たちの生活

委員 本弘禮子（津 教会）

私に関わっている児童養護施設の子どもたち、知的障がい者施設の人たちの生活からご報告します。コロナ禍での生活では、マスクの着用、丁寧な手洗い、手洗いのあとの消毒、いつものタオルをペーパータオルに替えること、換気の習慣など、これまでと違った習慣を身に着ける必要がありました。子どもたち、障がいを持つ人たちに関わる大人は、新型コロナウイルスの感染によって、苦しい思いをすること、人の命が奪われることを、ひとりひとりが理解できるように、絵を使ったり、医療用語をやさしい言葉に置き換えるなどの工夫をし、繰り返し伝えていきました。それは根気があることでしたが、繰り返し行っていくことによって手洗い、手の消毒などを身に着けて、自分たちの健康を守ることができるようになりました。

また、学校が休校になった間のことです。子どもたちは普段、学校での友だちや先生など、施設の友だち、職員とだけではない人々との間で生活しています。施設の外の人たちとの関係が閉ざされると、それまでの人間関係のバランスが崩れます。あの友だち、担任の先生に伝えたい、ということができなくなりイライラがつのってしまいます。そうするとどうしても、施設中の友だちや職員にストレスの矛先を向けてしまうのです。ですからいつもよりも小さなきっかけで喧嘩が起きたり、普段は穏やかな子どもが突然、怒りを爆発させてしまうことがありました。

新型コロナウイルスの感染拡大が始まった2020年の始めから、毎年行われる遠足、キャンプ、山登り、海水浴などの行事は中止となりました。いつもこれらの行事によって身体も、心も解放することができるのですが、それができませんでした。子どもたちは我慢していますが、本来解放できた気持ちや、身体の中にたまったエネルギーの発散ができず、ストレスが溜まっています。障がいを持つ人たちも、いつもの楽しみが奪われることを受け入れられず、その気持ちの持って行き方が難しかったようです。いつもと違う行動をとったり、怒りや、悲しみなど負の感情をあらわすことが多くありました。子どもたちは、今年は「何もできない年」「コロナコロナの年」と言っていました。コロナで一番嫌なことは「マスクを一日中していること。」「早くマスクをはずせる日がきて欲しい。」と言っていました。

一刻も早く新型コロナウイルス感染の終息を、心の底から祈ります。

【障がいを持つ子どもたちの状況】

コロナ禍の障がいを持つ子どもたち

委員 水谷恵子（飛騨高山教会）

[1] うつ症状、不登校、精神障がいの子どもたち

a. 「中学入学したら」「高校ではやれる」と、2020年4月に環境が変わるのを機会に「やり直そう」「変わろう」と夢を描いていた子どもたちの期待は削がれてしまいました。新しい友達関係を築く機会もないまま、不登校を続ける子どもたちが多いです。

b. しかし8月の学校再開をチャンスとできた例もありました。知的障がいがある外国人労働者家庭の中3A子は長期不登校でしたが、「みんなと同じだから挽回できる」と発奮し登校。先生や級友に恵まれ、秋の学校生活を楽しまれました。家計は厳しく、進路は限られていますが、受験にも希望を持って努力するようになっていきます。

c. 数学だけは群を抜いていた自閉症の少年が落ち込んでしまいました。自宅待機中、オンライン・ゲームに明け暮れ、体力・筋力・学力をなくしてしまいました。

d. 一方、多動性症候群の少年は、毎日、野山で遊び放題でした。英語も漢字もゲシュタルト崩壊現象*1をおこしてしまいますが、体力をつけ、学力劣等感など吹き飛ばしてしまいました。

コロナ禍での障がいをもつ子どもたちへ影響は、このようにさまざまですが、あまり表面化しない、不安を人より感じている子どもたちへ眼を向けることも大切だと思います。

[2] ひといちばい敏感なこどもたちへのサポート

HSC (Highly Sensitive Child) というのは、生まれつきとても敏感な感覚や感受性を持った子どもたちのことをいいます。恥ずかしがり屋・怖がり・臆病・過敏すぎという特徴があります。「感覚的な情報を深く受け止め、じっくり考える。行動を起こすのに時間がかかるため、引っ込み思案にみえる。人より過敏に刺激を受けやすいので疲れやすい。他人の悲しみや不安などの感情に強く反応する。ささいな刺激に左右されやすい」などです。今まで、無視されたり、病気とされてしまっていました。

これは生まれ持った気質であり、個性です。5人に1人はHSCだともいわれています。けれども「なんで勝手に傷ついているのだ?」「起こった現実や、相手をいつまでも許せないから駄目なのだ」と、周囲は裁いてしまいが

ちです。大人でもコロナ禍のマイナーな情報の中におびえ、「人間って弱い」「自分も弱い」と、自己否定の感情に押し潰され、閉じこもってしまう人が増えていて深刻です。

こういった方々の心のケアや居場所に、教会が今こそ、声をかけ、耳を傾け、手を伸ばせたらと思います。

[3] 自分自由研究・・・手掛かりになるかもしれないこと

去年の「障がい者と教会」交流集会では、ベテルの家の向谷地生良先生の『当事者研究』を学びましたが、その子ども版といえる「自分自由研究」を勧めるのは良い方法です。本人の気づきの機会になり、他者にも本当に深い心や感覚を持っていることを伝えられます。HSCの子どもたちの繊細さは、逆に才能や長所になり得ます。肯定的な声かけや、感じ方を良い方向へ周囲が言い換え続けると安心し自信が生まれます。

周りの感情をもらい過ぎている時は、休ませ、音楽や芸術に触れさせて洗い流す機会を作ると落ち着いてくる場合があります。

狭い視野で怖がるのではなく、ずっと広い選択肢をみるように助言したり、自分のエールソング（賛美歌でも、若者ソングでも）や、聖句を探す手掛かりをあげるのも良いです。緩い人間関係を複数持つように手助けするのも大切です。（友人に求め過ぎて失望し、心を閉ざす子が多いです。）そのような交流の中で互いに育ち合えればと思います。

三人の子どもたちが、コロナをテーマにしたこの冊子のためにイラストを描いてくれました。熱心に取り組んでくれ、描くことがまた彼女たちの心の発散やエネルギーになったことを感謝いたします。

3・11東日本大震災の避難所で「いいことばかりの壁新聞」を掲示し、人の心に明かりを灯し続けた子どもたちがいました。

このコロナ禍でさえも、主は益としてくださることを伝えつつ、共に歩み続けたいです。

『光は闇の中で輝いている。

闇は光に勝たなかった。』

（ヨハネによる福音書1章5節）

[聖書協会共同訳]



【難病を抱える人たちの状況】

難病を抱える人がコロナ禍を生きるために

委員 和田 芳子（東海教会）

膠原病のシェーグレン症候群という難病と診断され、その症状を抱えながら生活している友人がいます。難病を抱える方が、新型コロナウイルス感染の中でどのような思いで、注意しながら生活をしているのかを教えてくださいました。

<シェーグレン症候群とは>

シェーグレン症候群の症状は主に唾液や涙などの分泌が正常より少なくなり、自己免疫疾患による腎臓病や関節リウマチを併発することがあります。その他にも微熱が出て、ふらついたりするという人もいます。唾液が少ないので虫歯になりやすく、味がよくわからないという人もいます。それらの症状は原因がわからないので治療ができない、もしくは対処療法で暮らしていくということになります。

膠原病は免疫の異常反応でおこる病気です。そのため免疫抑制剤が処方されます。インフルエンザや普通の風邪も感染しやすく重症化する可能性が高くなります。すでにワクチンや治療方法が確立している感染症でもそうなので、新型コロナウイルスにはより気を付けなければいけない状態が続いています。

<外出について>

昨年3月に新型コロナウイルスの感染が拡大したときから、ずっと緊張した生活を続けています。当初は現在以上に未知の部分が多かったこともあります。都市部で暮らしているので怖くて家から出られない。家族が外出するのも、その先で感染して家に持ち帰ったらと考えると、なるべく外出をしないでほしいと頼んでいたそうです。

4月からゴールデンウィークまでは仕事を休暇にして通勤はしないようにしました。でも、暮らすために外出しなければならないことはあり、人との関わりは必要です。外出は、不要不急に含まれない通院、体力維持のための散歩、買い物などにする。他にも1日に会って話す人数の制限を決めるなど、感染予防に注意したそうです。外出するのに、雨の日のほうが安心できると感じていて、傘をさすので人との距離が保たれるからです。また、外出先に

空気清浄機やアルコールなどの感染対策がされているか、換気がされているか、人が密集していないかを確認するようになりました。

<生活の中で感じること>

昨年の緊急事態宣言が解除されたころ、職場への通勤に戻りました。膠原病による体調の波があるので、電車通勤そのものが辛い日もありますが、さらに、電車の中での新型コロナウイルス感染についても緊張を強いられます。在宅で仕事をする方法も考えましたが、職場内にいることで社員同士がそれぞれの状況を共有する必要を感じ、非常時ほど身近な情報交換は大事だと実感したそうです。また、関係者と実際に会うこと、話すことは、仕事による充実感など良い影響があり、ストレスが増える部分と逆に解消される部分との両方がある、作業が進めばよいということだけではないともっていました。

<本人のことば>

体調はいつも不安定で波があります。体調が良くても不安と気持ちの重さを感じます。

2021年の明け早々から各地域で緊急事態宣言になりました。毎日感染者数を見ながら、地域の人口との割合、病院のベッド数や救急対応の状況などをチェックして、今日明日どう暮らすかを考えています。当然、距離をおくこと、マスク使用、三密回避などの予防をしながらです。これは難病や障がい者のみならず、高齢者の方々も同様でしょう。

同じ病気で病歴が長い人は、感染症予防も制限のある暮らしも、これまでずっとこうだったと言います。周囲の人がマスクをしてしょっちゅう手指消毒をして店も清潔になって、ずっとこうだといいのにも言います。コロナ禍というのは、病気や障がいがあるなしに関わらずほとんどの人が、社会的な弱者になっている状態なのだと思います。

当面は感染を抑えることに迷いなく、社会が対応していくことを願います。

<わたしたちにできること>

このように、疾患を抱えておられる方々は、基本的に感染のしやすさと重症化の危惧を抱えつつ、気持ちの上でも二重、三重の不安と負担を感じています。お一人おひとりの命と生活を守るために、感染防止に努めつつ、様々な方法を使っての交わりを続け、支え合っていきたいと思っています。

【愛実の会からの声】

コロナ禍における愛実の会が直面している問題 ～重い障がいのある方々の不安～

愛実の会 理事長 戸田真二

新型コロナウイルスの感染は、障がいのある方々、家族や支援者を含め先の見えない大きな不安となっています。不安とは、障がいの有無に関係なく誰にも起こっていることですが、ここでは特に障がいの重い方々についてまとめてみました。感染した場合、重症化するのは高齢者と基礎疾患のある方。女性より男性が多い。最近のデータではO型の方は重症化しづらいとの報告が出されています。一方では障がい者は重症化しやすいという情報が漠然とあるのです。80歳以上の致死率は高く、重度の障がい者にとっても重症化＝死という恐怖があるということです。

当事者の声

- ・『もしうっかり手を洗うのを忘れて、自分の口を触ってしまったら？』『もし罹ったらどうなるんだろう？』そして『私は死んでしまうの？』。
- ・マスクを付けることができず、特異な目で見られてしまう。
- ・重症化しやすいという理由「障がい者なのだから出かけない方がいい…」周囲から言われる。
- ・身体介護無くして生命維持は不可能なことなので、ソーシャルディスタンスは守られないこと。
- ・感染=命の危機と捉えているので、外出は難しい。感染のリスクは健常者よりも増大。

家族の声

- ・私の場合は基礎疾患があり体力も普通の人より劣ります。息子に移ったらどうなるかも心配で、重症化する可能性が高いと言われ、さらに一緒に暮らす母が80代と高齢。家の誰かが感染すれば、全員が重症化する危険がある。
- ・親が新型コロナウイルスに感染したら、同居する障がいのあるわが子の生活はどうなるのか？誰が見るのか？入院先をすぐに見つけたりすることも難しく、一時的な入所とか対応も不安。
- ・長期間の自宅待機により、親子とも、心身共に追い詰められ、自粛が続くと親のストレスが、虐待にもつながる。自宅への引きこもりの長期化・孤立化への不安。

また、ヘルパーを利用しながら自宅で暮らす人たちも、感染リスクの不安を抱えています。ヘルパーを感染リスクにさらすこと。ヘルパーは自分や家族への感染を心配しながら、(利用者に)感染させてしまわないかと心配しながら働いています。身体的距離の確保がネックとなり、気軽に支援を頼みづらくなった。人のことにかまっていられない雰囲気が増し、健常者との障壁が大きくなった。過敏に接触を避ける人が増え、手助けしてくれる人が減った。社会の理解が後退した気がする。障がい者は置いてきぼりにされていくと感じている人も多くいるようです。

通所施設の現状（愛実の会の場合）

緊急事態宣言が発令されても、通所の施設は休業要請の対象外とされ、事業を継続して来ました。自ら自粛し利用を中止されるメンバーもいますが、家に引きこもる介護負担や生活リズムの乱れ等、日中の生活支援の必要性からデイサービスの利用は通常通りの開催を行っています。

ほとんどのメンバーが身体介護の必要な方々です。施設内は感染対策を徹底しながら、メンバーの介護を行っています。介護＝濃厚な接触です。マスクを付けられないメンバーも多くいます。感染のリスクを感じながらも、メンバーの笑顔を大切にきて来ました。外出活動は一切出来なくなりました。イベントや人形劇の活動もできません。食事のスタイルも様変わりしました。できる限りの感染予防をしながら、メンバーと職員の命を守ることが優先されています。見学や来訪者の入室制限もあり、アクティブな愛実の会にとっては本当に息の詰まる日々を送っています。一方、この間も多くの方から応援のメッセージをいただき、また手作りマスクの寄付もありました。あたたかさに触れながら、物理的な距離はとつても心の距離は縮め、思いやりを育んでいきたいと願っています。幸いにも愛実の関係者は一人の感染者も出ていません。そして職員全員が、コロナ禍にあっても使命感を持って働いてくださっていることに心から感謝です。

※「愛実の会」については、16ページ【注釈】*2をご参照ください。

【注釈】

*1 (10ページ)

ゲシュタルト崩壊現象

「ゲシュタルト崩壊」とは「全体性が失われ、各部分に分かれた状態で脳が認識してしまう現象」を意味する、心理学用語の一つです。全体を構成する各部分に切り離された状態で認識されてしまうため、ひとかたまりの文字や形として認識することが難しく、文字・漢字・図形等の全体の形がわからなくなってしまうのが特徴です。

*2 (15ページ)

愛実^{あみ}の会（特定非営利活動法人）

障がいのある方と、そのご家族及び関係者に、障がいのある方が地域で生き生きと生活できるための各種生活支援に関する事業を行い、地域福祉の増進に寄与することを目的としています。重度の障がいを持つ方も安心して地域生活を送ることを実現するため、他の団体と協力して1日24時間のサポート体制を目指しています。

1947年に、愛知県立港養護学校の父母により活動が開始されました。

1996年に人形劇団「紙風船」を結成し、その後も障がいを持つ人たちの生活を支える活動を広げて行きました。

2007年に、特定非営利活動法人「愛実の会」を設立し、2018年に、名古屋市より認定NPO法人の認定を受けました。

愛実の会は、1.個性の尊重 2.コミュニケーションの重視 3.地域生活支援 4.地域とのかかわり を理念に、メンバーをとりまく環境との垣根を取り払い、共に助け合い、共に歩み、共に認め合うことを目指しています。

現在は、障がい者デイセンター愛実として、「大地の家（生活介護事業）」「人形劇団紙風船（生活介護事業）」「居宅介護事業あみ」などの事業を展開し、メンバーの多様なニーズに対応した活動を行っています。

詳しくは、愛実の会ホームページをご覧ください。

<https://www.aminokai.com/>



【おわりに】

「ソーシャルディスタンス」と「フィジカルディスタンス」

委員長 柳本秀良（岡崎教会）

コロナ禍が1年以上続いています。その間、「ソーシャルディスタンス」（社会的距離）という言葉が、「感染を防ぐための人と人との距離」という意味で、当たり前のように使われています。しかし、この冊子に寄稿された報告を読み、「ソーシャルディスタンス」という言葉が持つ意味について考えさせられました。

障がい者が生活するためには支援が必要です。その支援は身体に触れること、近づくことによります。つまり「人と人との距離」を取ることが困難なのです。生きるために必要な関係にも関わらず求められる「人と人との距離」をすべて「ソーシャルディスタンス」と呼ぶことになってしまっています。

「ソーシャルディスタンスは本来、人間の心理的な距離を示しています。黒人やエイズウイルス（HIV）感染患者への偏見から、社会的、心理的に彼らとの接触を回避する現象を表す言葉として使われたこともあります。」

（大西一成 聖路加国際大大学院准教授）

「ソーシャルディスタンス」という言葉は「人と人との社会的なつながりを断たなければならない」と受け取られ、社会的孤立を生む怖れがあるのではないのでしょうか。

コロナ禍は人と人との関係の分断を招いています。それはすべての人にとっての「生きづらさ」です。そして障がい者の「生きづらさ」をさらに増すことになっています。人と人との距離（ディスタンス）についてどう考えるのか、それぞれの報告が私たちに問いかけています。

ここで参考になるのが世界保健機関（WHO）による「フィジカルディスタンス」です。WHOは、感染を防止するのは物理的な距離であり、人は様々な媒体を通じて社会的なつながりを保つことができるとし、「ソーシャルディスタンス」（社会的距離をおく）ではなく「フィジカルディスタンス」（身体的距離をおく）という用語を用いるよう推奨しています。ここに、その問いかけへのヒントがあるのではないかと思うのです。

もちろん障がい者にとって「フィジカルディスタンス」を制限されることは深刻です。だからこそ人とつながること、社会とつながることが必要なのです。今こそ「人と人とのつながり」を大切にしていきたいと思います。

